

# 風土、文化、造形—人工構造物が示す光の効果— (1)

Climate, Culture and Art - Artificial structures has been shown (indicated) the lighting effects - (1)

---

神 田 毎 実

KANDA Tsunemi

The amount of heat that sunlight brings to the earth creates various phenomena on the earth. And they have created various natural environments on the earth along with the activities of the earth itself such as volcanic eruptions and orogeny. In these natural environments such as deserts, plains, fjords, oceans, and mountains, humans have created various structures adapted to the climate.

Structures such as temples, palaces, burial mounds, bridges and human dwellings are believed to be given shapes and surfaces that match the light of the local climate. These structures are monuments of activity, including the human spirit, and therefore the light effects they exhibit reflect the spirit of the local climate.

## 1.

「風土」という語を、英語では「気候」という意味を持つ climate、「風物」という意味を併せ持つ natural features、「精神風土」という意味あいで spiritual features という言葉によって表現する。climate は、更に「地方」「地帯」「思潮」といった意味を併せ持ち、古代ギリシア語の「傾き」という意味の klima を語源とする。太陽放射光に対する地球表面の傾きを、地球の気候とその発生の仕組みとに結びつける思考には、「人類」の科学的観察眼と想像力の有機的連携を見ることが出来る。

現在、宇宙の成り立ちに関する新たな発見と様々な研究の進展により、これまで推測の域を出なかったものの正しさが立証され、最も確からしいとして「定説」「常識」とされてきたことがいとも簡単に覆されるなどして、我々はしばしば驚かされる。驚くべき不思議を含む全ての現象の中で、我々は常に驚きに直面している。それらの現象は「宇宙の合理性」に基づいて生成されるものであるから、そこには宇宙の仕組みが現れているはずであるのだが、宇宙はそれを簡単には教えてくれない。

星は塵を核として生み出されるという。地球もその一つである<sup>1)</sup>。その地球は、我々が太陽という名前と呼ぶ恒星の周りを一定の時間をかけて周回＝公転する惑星の一つであり、太陽と他の惑星および沢山の衛星と共に「太陽系」という集団を形成している。地球が太陽の持つ「魔力」から遠のくことは許されていないので、今のところ太陽が放つ様々な影響は常に地球に及んでいる。地球

の出現よりも前に太陽は存在していたとされるから、地球の環境とその形成は太陽の影響を除いては考えられないということになる。

地球は完全ではないがほぼ球体である。それ故にその表面は太陽放射光に対して常に何がしかの傾きを持つことになる。その傾きは太陽放射光の面積当たりの受光量に差異をもたらすために、地球表面には様々な熱量と明暗が生み出されることになる。しかしそれらは縦横無尽に連鎖していて常にその近隣同士で混じり合い、例えば白から黒の間に無限の諧調で灰色が存在するような状況が生み出されることになる。

更に、地球は自転しながら公転しており、その軌道は「楕円軌道」である。その影響は地球表面に発生する熱量に更なる変化を与える。

完全ではないがほぼ球体の地球表面は、太陽放射光に対して0度から±90度の「角度」を持っており、それらの組み合わせが地球に気候を誕生させる。地球は自身の「自転軸」に傾きを持っており、その軸はコマの回転運動の際に発生する軸のブレのように首振り運動を行っている。この地軸の傾きが地球表面に極めて複雑な熱量の分布とそれによる現象を引き起こし、地球上に「季節」を生成する。地球は季節ごとにそれぞれ特徴を持つ姿を現しながらその姿を千変万化させている。

地球はその内部に極めてダイナミックな活動を持っており、その活動は自らの地表面に常に影響を与えている。具体的には、「噴火」「地震」「それらに誘発される津波」「大気圏まで上昇した火山灰による太陽放射光の遮断」「新たな地形や土地そのものの生成」といった現象が上げられる。それらによる地球表面の生成の結果や様子は、「地質」「地形」「地勢」となって現れる。「硬さ」「軟かさ」「柔さ」「高さ」「低さ」「広さ」「狭さ」等々の様々な特性が、太陽光放射と地表面の間にさらに複雑な関係を生み出し、ますます複雑な現象を大気圏内に引き起こしていく。

natural features と spiritual features は、「特徴」という意味の features と、「自然」という意味の natural、「精神」「霊的」「無形」「精神的な」「信仰的な」といった意味の spiritual との構成によって成っている。それ故、natural features は地球上の事物の姿、spiritual features は人間の精神活動の姿に関する特徴・傾き = 「傾斜」「傾向」という意味における風土を表現するのであると理解される。太陽が生まれ、地球の生成が始まり、様々な環境が変化する過程で生命が生まれ、人類が誕生し、人類はその変化し続ける環境下において、精神の活動を含む様々な活動を展開し、自らもその環境内に「新たな環境」を創り出すことに加わることとなった。気候・風物・精神。地球の形状と太陽放射光の関係が生み出す傾斜が、自然と人の営みを含む「地球という風土」の生成に深く関わっている。

惑星表面は「大気」と呼ばれる「気体の層」で覆われている。大気は様々な気体の混合物で、気体自体も様々な物質によって構成されている。同様に地球という惑星本体も様々な物質により構成されている。人類を含む生命の営みのほとんどは、この惑星本体の水中を含む表面とそれを包む大気の層の内において行われる。それ故、地球という惑星を対象に風土について考える際は、その双

方を含めた意味における地球の風土を想定する必要があるのである。地球は物質の「集合体」であり、千変万化する物質の「集合態」である。そこには全ての「生命の営み＝生命活動」も含まれる。

物質はそれぞれに状態をもち、それぞれに「気体」「液体」「固体」と呼ばれている。気体は物質の集合状態が極めて粗な状態で、熱や圧力により自由に体積を変化させる。液体は物質の集合状態が密で固体の状態に近く表面を持ち、圧力下において一定の体積を持つが気体同様に特定の形を持たない。固体は気体の対極の状態にあり一般に物質の集合状態は極めて密である。したがって固体は外界からの圧力等に対して強い抵抗力を持つ。しかし、気体・液体・固体は「物体の一つの状態」であるにすぎず、永続的な安定性を持つものではない。気体は冷やされれば液体に、更に冷やし続けられれば固体となる。その変化は可逆性を持っており、その変容は与えられる熱量に左右される。つまり熱量は物体の有様に対して大そう強い影響力を持つのである。それは例えば地表の「岩石の風化」や、地球内部における「岩石の液化」「氷塊の液化や気化」に代表的に確認される。

何かを成そうとする時に人間は二種類の熱量をもって事に臨む。一つは身体を動かすための、もう一つは精神を動かすためのものである。その際に準備され消費される熱量の大小は、対象に対する切実度に比例する。日本では後者に関わる熱量のことを「情熱」と呼んでいる。情熱という語を英語にしようすると、passion・enthusiasm・zeal・fervor・ardor・fire・spirit・excitement等々の沢山の単語に出会うことになる。それらは状況、環境に応じて使い分けられるのであろうが、英語に通じない私にはどのような状況でどの単語を使用するのかといったことについての見当はつかない。まして語源の違い、英英語と米英語の違い、発音の違い、世代の違いなども関わるとなれば、幾つかの辞書を駆使し、複数の事例も参照し、更に想像力を働かせてそれらの合理的な関係を考えているということになり、「実生活の中で自由自在に」など到底望むべくもないお手上げ状態である。

その昔、「この国の人間になろうと思ったら100年かかるよ」と言われたことがある。何十年も前に海外に住まいをしていた時の話である。情熱を示す英単語についての説明を詳しく出来るようになるためには、100年に値する生活の蓄積が必要なのであろう。

「情熱」という語、概念に対応する沢山の英単語の存在は、情熱という語が持つ「広がり」を証明している。それらは個別に異なった音の組み合わせ、文字の組み合わせで構成されているのではあるが、他の言語の中に存在する単語との類似性を感じさせるもの等もあり、個々の単語について注意深く検討していくことで、その単語が持つ幾つの特徴・傾き＝傾斜・傾向から、時にその単語が内包する風土への到達が可能となることがある。勿論、論理性を伴った一定の想像力が必要となるのであるが、言葉・単語を表現の「媒体」「素材」「材料」として捉え、その言葉・単語でしか表現できない意味について思考することは、「文物の交流・交差」「歴史の意義」、ひいては人間を含めた「存在」「生命」について考えるという意味も含めて極めて重要なことなのである。

宮沢賢治の詩は、いわゆる標準語に置き換えられたことで広く受け入れられるようになったと聞

く。ならば、その過程には自らの「仕事＝作品」に関わる幾つかの取捨選択が存在したに違いない。如何様にしても捨て去ることが出来ぬものとして残ったものに、彼の中心、自身の風土が留まり続け、その特徴＝featuresが際立たされるのである。お国言葉によって発音される宮沢賢治の詩を体験した時に示される喚起力はどのような感覚をもたらすのであろう。方言から標準語へ、標準語から「私の方言」へと向かう「抽象の過程」を経て、個々の精神の風土が姿を現すのである。

2.

物質は質量を持つゆえに全て重力の影響を受ける。その影響は物質の状態によって様々であり、その様々な影響の複合として様々な現象が地球上に生み出される。それは時として劇的な事件であり、その連鎖としてのドラマである。その現象は全て物質そのものの特性における合理性の上に生み出されている。物質は一つの状態であり、その状態が崩れなければ事件は発生しない。事件の発生には物質の状態に「変質」と「変容」が起こる必要がありそれには熱量が必要である。

しかし今そこに人間の存在を予定しないとすれば、自然はその変質と変容を得るための熱量を何によって得るのであろうか。自然とは「自ずからそうなること」「人為の加わらない、天然のままであること」。「様々な傾斜・個性を持つ自然の生成」に、地球内部のダイナミックな活動と太陽放射光と地球表面が持つ角度が深く関わっている。それは「大気と水の循環の現象」に代表される。

太陽放射光が地表にもたらす熱量は、地表近くの重力の影響を強く受ける密で重たい空気を温める。温まった空気は活発な分子運動を展開し膨張をはじめその体積を増大させる。この膨張は空気に与えられる熱量によって差異を持つ。それは、日の出から日の入りまでの太陽放射光と地表面の角度の違い、昼と夜の長さ、季節ごとの太陽の南中高度の違いによって引き起こされる。大気と水の循環に代表される様々な現象は、地域の特徴・特質・性格を現す環境としての風景や光景として姿を現す。人類を含む生命は、常にその環境と共に在り続けている。

表.1 観測点ごとの薄明と薄暮

地名 国名	緯度 経度	標高 (m)	薄明開始↔日の出	継続 時間 (分)	薄明開始↔日の出	継続 時間 (分)
			日の入↔薄暮終了		日の入↔薄暮終了	
アスワン アラブ・エジプト共和国	N24度04分40.75秒	133	06: 04-06: 48	35	04: 33-05: 27	54
	E32度53秒14.69秒		18: 52-19: 42	50	18: 10-19: 11	61
アレクサンドリア アラブ・エジプト共和国	N31度12分04.一秒	10	06: 12-06: 42	30	04: 31-05: 36	65
	E29度54分02.一秒		19: 12-19: 57	45	18: 20-19: 27	67
イラクリオン ギリシア共和国	N35度20分03.71秒	18	06: 29-07: 07	38	04: 48-05: 54	66
	E25度08分11.68秒		18: 58-20: 08	70	18: 39-19: 48	69
アテネ ギリシア共和国	N37度58分40.75秒	82	06: 33-07: 23	60	04: 53-05: 59	66
	E23度44秒07.99秒		19: 27-20: 32	65	18: 42-19: 54	72

注: アレクサンドリア及びイラクリオンについては、薄明前から日の出までのデータは翌朝の撮影データから取得。  
 黒文字は写真データからの数値。赤文字はステラナビゲータ11によるシミュレーションによる数値。  
 網掛け部分は、アテネ市東方の山地に直射光が遮られたことが影響していると考えられる。

表.1は、2003年に実施した予備調査の後、翌2004年8月末から9月にかけて行った定点撮影における連続写真への俯瞰から得られた副次的なデータである。

ここで注目すべき点は、撮影地点における薄明・薄暮の時間の長さの相違と緯度の関係であるが、この撮影は、薄明・薄暮、即ち夜明け前と日没後の時間の長さ等の観測を本来目的としていないため、撮影された写真のコマごとに付される時間データは特定できるものの、日の出、日の入りの際の太陽の正確な位置等に関する映像を収め切れてはいない。そのために、天文シミュレーションソフトに観測点の緯度・経度・標高・撮影年月日のデータを入力して得られた数値を参考として赤色で付した。現地収録したデータには、観測地の高度、障害物の有無等が、確実に反映されていること、また、目視における確認に際しての人間の視覚による補正の影響等を含め、シミュレーションによるデータに比べばらつきが見られる。但し、この両者を併せて検討することで、観測地点ごとの異なった条件の影響下にありながらも示される統一的な傾向が確認される。それは緯度の上昇に伴って、薄明と薄暮の時間が延びるという点である。これ自体は地球の直径の変化と太陽光の回り込みの現象から特に驚くべきことではない。重要なことは、その結果であり影響である。薄明・薄暮の長短は、太陽放射光の直射により生まれる強いコントラストの少ない、柔らかい光、柔らかい拡散光の下で物体を眺める時間の長短を左右するのである。

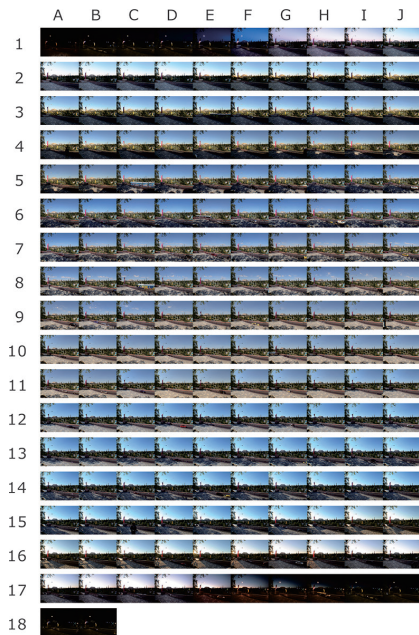


Fig.1a アテネのアクロポリス定点撮影 (カラー)  
筆者撮影・作成

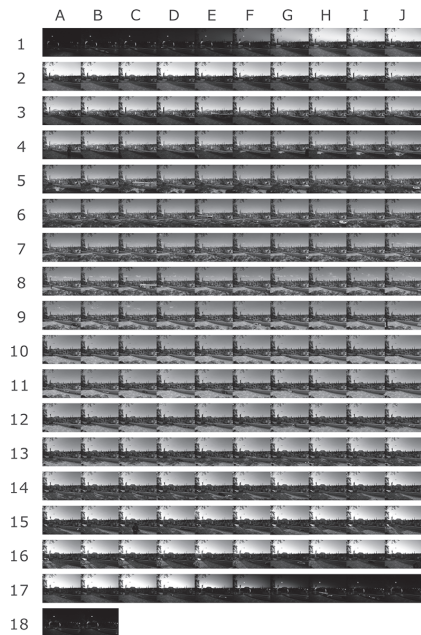


Fig.1b アテネのアクロポリス定点撮影 (モノクロ)  
筆者撮影・作成

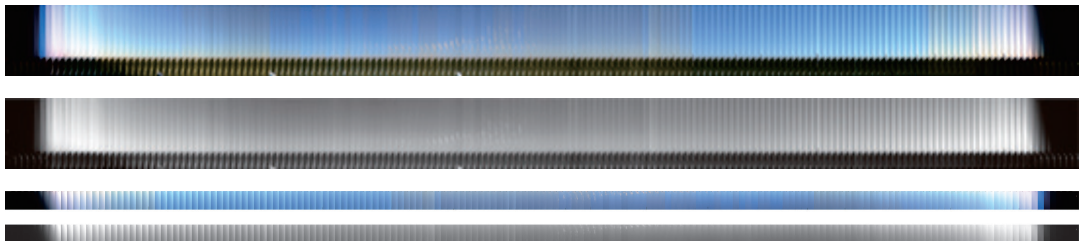


Fig.2 Fig.1a・Fig.1b を編集して得た色味と明暗の情報 筆者編集

Fig.1a は、アテネにおける、アクロポリスを中心に行った撮影データである個々の写真を連結させることによりポジフィルムのスリーブ風に編集したもので、Fig.1b はそれをグレートーンに変換したものである。また Fig.2 は、Fig.1a・Fig.1b を構成する各写真の本来の被写体の部分を重ね合わせ隠すことで、単なる色彩、明度の変化のみを確認できるようにしたものである。Fig.1a 及び Fig.1b 共に、暗から明、明から暗への移行を表現しているが、Fig.1a において各コマの色味・彩度が高くなっている部分、即ち、日の出以降の部分について注目すると、明度自体が低くなっていることに気が付く。それは Fig.1b との比較においてより明快に理解され、Fig.2 を参照することでより明快になる。「明るい」「暗い」ということの定義については、認知に関わる研究において様々な取り組みが行われていると考えるが、敢えて誤解を恐れずに述べるとすれば、「明るい昼間は暗い」と表現することが可能なのであると考えるのである。そしてその暗い昼は、低緯度に向かって長くなり、朝夕に現われる穏やかな「明るい暗がり」は短くなっていくのである。2004 年の撮影における副次的な結果をまとめた表 .1 はそのことを示すと共に、太陽放射光を遮る障害物や標高についての影響も示しているのである。

このことを踏まえて、2010 年から 2011 年にかけて北極圏における観察を試みた。北回帰線直下から緯線に沿って北上した 2004 年の試みと北極圏における試みを合せた考察の記述は次回に行うこととするが、あくまでも極論においてのことであると前置きをしたうえで、白夜と極夜の世界に暮らす人々は、半年を太陽のもとで、残りの半年を星空の下で過ごすのだと仮定してみよう。白夜においても、極夜においても人間は睡眠を取るのである。「どれくらい寝るの」との質問に、「同じくらいだと思うよ」と当たり前の答えを現地において頂いた。乱暴な表現ではあるが、極地に近い地域で生きる人たちは直射日光が生む強いコントラストの下で物を見る時間が短いのである。明度と彩度、柔らかさと硬さ、巨大な自然と人間の主張。生み出される生活の「様式」に、統一的で、極めて特徴的な姿が現れているはずである。そしてそこには、どのような地域の営みに対しても理解の糸口となる仕組みが存在していると考えるのである。質と量、人間の精神の活動にも関わる「地域に個別の時間」が存在している。

太陽放射光の傾きもたらす「熱量と生命のドラマ」を「風」と「土」の二文字の組み合わせによって表現したのは古代中国であり、その原義は「季節の循環に対応する土地の生命」とするといふ。多くの文字体系と同じく漢字もまた象形文字から発している。象形とは物の形を象ることを意味するのだから、その生成には物の形や有り様に対する冷静な観察とおそらくは人間の感受性を伴った眼差しが存在していたと考えられる。

漢字の「風」は、音と形の組み合わせとしての形声文字であり、「虫」が形を担い、「凡」が音を担っている。虫とは動物の総称であり、凡には汎と同様に「広がり」という意味が含まれる。虫は一年中で最も早く生じる生命であり、風は空気の動きである。文字である風は、「空気が動く」と虫＝動物＝生命がそれに応じて生まれる」という意味や現象をその形に抽象している。偏と旁の組み合わせによりその成り立ちと字義を示す漢字は、文字を構成する線の構成や律動にそのリアリティーを託し、

それ自体が「書表現」として確立される。

有名な『説文解字』の存在によって、風と土という文字の定義は、紀元2世紀の古代中国ですらでに成立していたことが理解される。説文解字は皇帝に奉じられたものである。更に、この時代には『風土記』と称する地誌書が登場し始める。それ故、紀元2世紀以後の中国ではこの言葉についての統一的な解釈が成立していたと考えることも可能となる。

現在の中国すなわち中華人民共和国はユーラシア大陸の南東部に位置し、14カ国と接している。国民の大多数を占める漢民族・モンゴル族・チベット族・トルコ系諸族・ウイグル族・チワン族・ミャオ族・ヤオ族等55種の少数民族により構成される人口14億人超の世界最多、国土面積9,600,000km<sup>2</sup>超、世界屈指の大国である。そこには様々な民族の「交差」「錯綜」「交配」を予定することが自然である。国土が14の国と接するということは、その国はその国の境地域・周辺・辺境において、14の国の考え方と触れているという事実を示し、それが国境を跨いで生活をする民族双方によって共有されていることを示すのである。双方の国の辺境は、単に国境を挟んで並列するのではない。それは国境を跨ぐ緩衝地帯であり、「異なった考え方」の双方向の行き来と交配と輻輳により、まだ見ぬ価値の生成の可能性を含む新たな広がりなのである。時代とは無関係に、中国はユーラシアの広がりの中で多くの国家や民族との境界を共にしている。それは古今を問わずユーラシアの全域で展開されてきた「人間を含む風土の姿」なのである。

このテーマにおける考察を開始した当初、人類の最初の東進の性格について、自らの生まれた環境への回帰の性格が見出される旨を記した。その東進の性格について、太陽放射光に関する視点をもって今少し書き加えるならば、西へと去っていく太陽への追従を離れ、東方から必ず現れる太陽の「在処」「明るさ」「暖かさ」「温かさ」「心地良さ」「快樂の在処」へ近づくことを目途とした、「好奇心」と呼ばれる「興味を満たす欲求」を遥かに超えた、おそらくは「情動」にも近い「衝動」による「快への道のり」であったと考えるのである。

「快樂」への疾走は飽くことを知らない。それは恐らく何物にも代えがたい価値であり、「美」の感覚に殉ずることであったと考える時、「人類の性向・性行」としての「過剰な自己主張・他者否定の行為」として、「今日我々が暴力と呼ぶ行為」が、避けがたいものとして生み出されるのではないか。人類の旅は時に「滞留」し、それにより生まれる「輻輳」により新たな広がりとなり成熟を得、更なる東進の先に待ち受ける「ボトルネック」と呼ばれる、地形・地勢・気候・気象等の条件による人の流入と排出のアンバランスにより生まれる高圧で濃密な様々な交配を経て、一気にその向こう側の広がりへと展開される。その現象は、身近には砂時計や水時計に見られる物理現象と極めて類似しているように思われる。人間も宇宙が生み出す自然、或いは現象の一つである。自然の摂理に自から従うことについて不自然と思う理由は無いのである。

大気の循環を生み出す熱量は土地ごとに異なる。それは、例えば降水量、或いは植生、更には地形・地質に影響を与え、結果として作物の栽培適性や収穫量、更には漁業における魚の種類や漁獲量等に影響を与える。勿論、その土地の特性は様々であるのだから、「土地の豊かさ＝生命」を生み出す力も様々である。それは「豊かさ」に関わる、質的な差異・量的な差異によって生み出される。そこに生きる植物や動物は、適応・適合の過程で異なった性格を纏うようになっていき、やがて姿形に反映されることになる。土地の特性による「豊かさの差異」の発生は、土地の特性の近似による「豊かさの類似」の発生を暗示する。例えば中南米地域の織物に用いられる文様や色彩には様々な類似が見られることは周知の事実であるが、そこから遠く大洋を隔てた地域でありながらも、一定の類似性を示すものが存在することもまたよく知られた事実である。人間による「もの」や「こと」の媒介と地域の地質や植生に由来する材料・素材の類似性がその要因であると想像される。

風土と climate という語についての変化の系統については不明であるけれど、豊かさとして人間が受け取ることの出来る事物の出現を契機に、地域の特徴・地域差という意味が含まれるようになっていったのだと仮定する時、それらは、「ニュートラル」「平坦」「零度」に対して一定の傾斜を地球という広がりの中で持つ時間・地域の特徴・地域差・地域性として受け取られるようになると考えられる。それらは人間の生活と直接関係する「経済」に関わる様々な差異をも生みだし、その過程において人間の精神活動に関わる様々な差異が生み出されていく。そこには、個々の人間やその集団としての社会の「価値観に結び付く感覚」の発生が含まれていたと想像される。そしてその感覚は、後世において美という語を用いて語られるものと類似する感覚であったであろうと想像する。

「文化」は、個々の地域や民族の特徴＝傾斜を表現している。その傾斜は、太陽放射光の入射角がもとになり生み出される。ユーラシアでは、様々な人種・民族・地勢・気候・言語が、物理的距離を越えて交差する。東西南北方向への縦横無尽な人間の動きによる生活に関わる文物や思考の攪拌とそれにより生み出されている変化・変容に費やされた人間の活動に関わる途方もない熱量と時間、「土地の持つ力」「土地に力を与える光とその傾き」が生み出す「人間の営みに対する巨大な影響」「巨大な磁力」「巨大な磁場」についての共通の答えが、ユーラシアの広がりには存在していると考えられる。「100年の歳月が必要」なのであると。

風土は「ふど」と発音されていたといわれ、それは中国の『風土記』の読みにおける発音においても確認される。日本の『風土記』は、中国のそれからは600年ほど遅れた西暦713年（和銅6年）に、中央政府からの官命により編纂される。それ故、中国において生まれた風土という「語」「考え」「考え方」が、日本における自然の捉え方にも何らかの影響を与えていると考えることに不都合はない。では日本において自身を取り巻く自然の営みとその現象への観察から何がしかの考えが生まれ、醸成されたと思われる事例としてどのようなものがあげられるだろうか。文化は地域や民族の特徴を表現するとするならば、日本の文化を代表する表現とはどのようなものであるのだろうか。

例えば、日本最古の歌集である『万葉集』は、「多くの言の葉を集めたもの」「末永く伝えられる



べき歌集」といった意味をその名に示すと言われ、様々な身分の人々の生活感・感情が詠まれた、雑歌・相聞歌・挽歌を収めている。また日本初の勅撰和歌集である『古今和歌集』は、四季と恋愛をテーマとした優美な歌を多く取り上げ、平安貴族にとっての「教養＝常識」とみなされたという。日本の文学・美術・芸能等に属する文物は、日本人のどのような傾斜を映し出しているのだろうか。更にその特徴は何によって生成されることとなったのであろうか。

日本列島はその細長い瘦身な国土故に、亜熱帯から亜寒帯までの気候を与えられている。その瘦身の国土は、動物の脊髄のように伸びる山地・山脈により南北、或いは東西に分断されて、個々に、日本海・太平洋・東シナ海・瀬戸内海といった大海や内海に面している。「山陰」「山陽」。脊髄の北と南、或いは西と東の斜面に日本は異なった「光の世界」を持つ。しかし日本は北回帰線よりも北に位置するため、太陽は常に国土の在る位置から随分南で折り返していく。それ故日本は、一部の地域を除けば、普段は総じて湿潤で穏やかな気候の中にある。

大気の循環は土地が持つに至る熱量によりその大きさが決まる。しかし瘦身の日本には、その蓄熱を行う土地が、特に平野の面積に示されるように小さい。故に日本の地域ごとの土地が蓄える熱量は大陸に比べればはるかに小さい。

日本は地域ごとに微妙に異なる比較的小さな熱量の連続体である。亜熱帯から亜寒帯に向かってその比較的小さな熱量は穏やかに減衰して行く。そこには穏やかな熱量の変化に対応する繊細な差異を連続させる国土が出現する。主に緯度差によって生成される太陽放射光の多様な入射角の存在は、多様な熱量と多様な反射を生み出し、おそらくは多様な動植物の生育環境の生成に深く関わると考えられる。それらは多様な「光の反射」と共にあり、多様な視覚刺激として我々の肉眼に捉えられる。そこには穏やかで微妙、繊細な、時として荒ぶる風土とそれを表象する感覚が生成されている。しかし日本の風土の典型は何によって示されるのであろうか。その穏やかな連続のどこを切り出してその典型とするのであろうか。極東に位置する小さな熱量しか蓄えられない国土と、それを遥かに凌駕する熱量を持つ海洋。そこに発生する水蒸気も含めた茫洋とした全体・広がり。それこそが、他の地域と部分的な類似を確認することが在るとしても、凡そ世界に類例を見ない自然環境としての日本という風土の姿を表現していると考えられる。

地球は、陸と海洋で構成されている。陸の広がりには様々な特徴を見せる。陸の旅行を行えば、それは尚更強い体験として我々の内に記憶される。しかし、その陸の広がりに海洋の広がりが加わる時、風景に大きな変化が現れるように思われる。海洋の面積は、地球の表面積の60%を超える。航空機の巡航高度を遥かに超えた宇宙空間から地球を眺めた時、陸と海洋は一つの風土として一体で捉えられる。海洋とそこから生み出される水蒸気と雲に包まれた陸地。水蒸気の塊であり広がりとしての雲の切れ間から、陸と海洋の姿を垣間見せる地球は、様々な地形や地勢が連続する存在であり、そのどこか特定の場所・部分が地球の風土を代表するというわけではないということが理解される。そのように考えた時、地球と呼ぶ風土と、海洋を含む瘦身の日本の風土の間の類似性に気づかされる。

瘦身の日本の風土に地球という風土の縮図を見るのである。

風土と文化について、特に造形物を中心にその関係性に対する確信を得ていくためにはどのような手段があるであろうか。風土と人間の精神性に迫ることは、造形物の意味を読み取ることのみでは極めて難しい。しかし、造形物は視覚においてその存在を主張しようとするための試み・手段の一つであるという考えには疑いの余地は無い。であればその造形に払われた努力そのものが、その造形美の高低の評価以前において、既に「光」と「陰影の生成」の重要性の主張の証として十分な力を持つと考えられるのではないか。光への強いこだわりを示す事例の提示のみによってその回答とすることが可能なのではないか。その際、その造形物自体が極めて高い造形美を示すものとしての評価を得るものであり、更にその効果の証明方法が単純なものであり、且つその造形物が存在する土地の風土を構成する、気象・地勢・地形といった要素の幾つかとの関係が示されるのであれば、今その典型の事例としようとする物の周辺に存在する幾つかの造形的類似を示す造形物や物体さえも、これまでの小さなテキストにより記してきた、光を窓とした風土と造形の関連性に関する仮説を補強する具体例として輝きを放ち始めるのではないかと思われる。

生活の様式や方法、集落や都市の形や景観、或いはそれらを含む全ての事物は「環境」である。それらは、「地域ごとの自然環境が示す姿 = natural features = 風土」の上に人間が生み出してきたものであり、人間の営みの基本・基盤としての地球の営みの継続の上に生み出されているものである。それ故そこには、その土地の風土の影響による独特の「かたち」が映し出されていると考えられる。では人間は、自身の生まれた環境の内においてのみ自らの生を営んで来たか。例えば、古代エジプトやメソポタミア文明における巨大建築物の誕生やフェニキア人の地中海での経済活動の展開が、結果としてレバノン杉の森の消滅を招いたという事実は、人間の営み = 人間の生活が、風土という環境への適応を果たしながら、自らに適した環境の生成を試み、ともすれば「全く新たな環境」を生み出すという二つの性格を遥か昔から有することを示す代表的な事例の一つである。

太陽放射光とその入射角によって生み出される神羅万象は、人類にとっての「不可思議の塊」であったと考えられる。人知を超えた力を持つ何者かの存在を予感させる不可思議を、宇宙から投げかけられる問いとして捉える時、光は人知を超えた何者かの存在を象徴する、或いは証明・保証するものであったに違いない。それは、暖かさ・明るさであり、「寒さ」「暗さ」から人類を解き放つものであり、自らの内に温かさ・心地良さを生み出すものとして捉えられていたに違いない。それは人類をとてつもなく長い旅へと向かわせる巨大な「引力」を持つものであったに違いない。そのように考える時、風土についての問いには、人類による、光とその現象を窓とした「自然の姿 = natural features」に対する観察によって導き出される「生命の存在」に関わる科学的、且つ哲学的な回答が含まれるのであると考えることが可能となる。

環境への従属と適応を経ることで得た適合とそこに始まる自らの環境の消滅、自らの破局へと繋

がる可能性を含む、おそらくは現在に至っても続くのであろう新たな環境の生成への飽くことの無い疾走。その中心、或いは中心近くには、暖かさ・明るさ・心地よさといった言葉から想起される快樂・欲望を含む「美の感覚」が、寒さ・暗さ・闇・謎といった言葉から想起される「死」「混沌」のイメージへの秘かな「憧れ」を含んで存在していると予想されるのである。

### 3.

太陽放射光との関係を示す造形物は数多く存在している。人間の生活の場としての家屋・その集合としての都市・社会的な権威の誇示を目的とした巨大建築物に構造物・記念碑、人間の精神活動の場・象徴としての宗教建築等々数え上げたらきりが無いのである。むしろ太陽放射光との関係を示さない造形物を探すことの困難を思い知るのであり、その事実だけで人類にとっての太陽放射光の存在の大きさが理解されるのである。

例えば、ローマカトリック教会の建築や古代ギリシア文明における神殿建築の多くは東西軸上に建築されている。また、古代エジプトのピラミッド・アステカ文明のピラミッド・マヤ文明の神殿建築の各面はほぼ東西南北に対応し、中には太陽の運行を利用して特定の視覚効果を演出するものも存在する。日本の仏教建築は、東西軸での配置を基本とする多くの浄土教寺院を除いて、南北軸を基本に建てられている。インドネシア共和国のボルブドール・カンボジア王国のアンコールワット・ミャンマー連邦共和国のバガンをはじめとする仏教建築群も、凡そ東西南北の「方位」に沿って建てられている。

ほとんどの建築物は矩形をしている。内部空間の活用の合理性を考えれば当然の結果と言っても過言ではない。それ故に、方位に対する多少のずれを持つとしても、自ずと建築物の各面はその地域の環境に則した方向に正対しようとし、東西南北方向に向かうのだとも考えられる。しかし、何故に地域の環境に則さねばならないのだろうか。例えばそれは、その内部を利用する人間や物の都合において発生すると考える時、人間の生活の場としての住宅においてはよく理解されると思われるが、神殿・教会等寺院のような一般的な意味での生活空間を含まない建造物においてはどのようなであろう。多くの場合そのような建造物はその内部空間に何がしかの象徴的な物体を収め、更にその物体は静止してその場から動かない。つまり内部に配置される物体によって生まれる「中心性」や物体が示す「指向性」によって、「構造物の方位」が生み出されるという可能性は考えられないだろうか。建築に指向性が発生するということは「軸」が誕生するということである。例えば仏教建築の成り立ちを考えてみることでその道筋が見えてくるように思われる。

仏教寺院建築の塔は、仏舍利＝釈迦牟尼の遺骨を納めたストウパーである。この建築の核は仏舍利であり、言わば全方位に向かって光を放つ「恒星」として塔の内側に存在している。日本においては東西南北に正対する矩形の断面を持つ建築様式が主流であるが、もともとはお椀を伏せた半球状の形態を与えられたものであって、その形はタイ王国やミャンマー連邦共和国などの東南アジア諸

国において現在も見ることができる。日本の多くの仏教寺院の塔の最上層の屋根の上の「伏鉢」はその名残である。

因みに、塔と並ぶ金堂の核は仏教經典であり、日本の仏教建築は釈迦牟尼の実体の形見としての仏舎利と、精神・哲学の形見としての經典の二つによって成り立っていたことが理解される。そもそも寺院とは悟りを開くための修行の場所であったと思われるから、始まりは、例えば樹木の枝葉が生み出す涼しい日陰であったと考えられる。その日陰は太陽の移動と共に動いていったのであろうから、悟りを開こうとする者は、その日陰の移動と共に自身も移動したのかもしれない。ただし後世の者としては、日陰の涼しさを求めてその都度移動する修行者の姿はそれに相応しくないと思うものだから、太陽がどのように動いても修行者が日向に露光されることなどない大樹を想定したところである。その日陰に釈迦牟尼の像を想定すると、空間における中心性・指向性の発生の瞬間に遭遇する可能性を手にする事となる。その遭遇は、「釈迦牟尼という存在に対する正対の感覚」が観る者に生み出された瞬間に訪れる。要するに、観る者が他者への注意を全て払拭して、釈迦牟尼だけに注意が集中した瞬間においてである。その瞬間に、釈迦牟尼を含めた様々なエレメントが個々に示す指向性の混在する場・広がり・空間は、釈迦牟尼という価値への「集約」と、釈迦牟尼という価値の「放射の場・広場・空間」へと転換するのである。

強い中心性と指向性を持つ物を内包することにより建築空間に中心と指向性が誕生する。故にその強い中心性と指向性を持つ何がしかは、その物自体を格納の対象とする建築・建築空間が想定される以前に誕生していたことになる。それ故、その何がしかを内包・格納するために生み出された構造物・建築物は、その軸の誕生を想定したうえで準備されるようになったと考えられる。

中心性、或いは中心を示すに至るものの姿、即ち何らかの価値を示すものの姿は、例えば「宇宙」のような、或いは宇宙の生成の前段階の宇宙の生成の可能性を含む混沌として先ず感覚され、次に人間の脳内において像を結ぶ準備が進められ、やがて何かがかきかけとなってある一定の指向性を纏ったイメージに集約されて姿を現し始め、ついに実態を示す実体としての「像」が生み出されるのである。その像は、始めはその像の価値をどのように示し得るかということに向かって作られるのだが、やがてそこに、観る者が何時それを拝するのか、或いはいつも拝されるべきものか、夕に拝したいか、朝に拝したいか、どのように拝したいのか、どのように拝されるべきなのか、というような目的とそれに則した効果についての思考が加わることになるのである。人類は様々な試行錯誤の過程において、定型的な形としての「様式の生成」とそのために必要な「材料の選択」や「道具の考案」に向き合い、おそらく「自らの価値の生成」のためであれば、万難を排する欲求を目覚めさせていく。そして、物体・空間・現象・人間・光・それらを含む風土により生み出される思考が、統一的な指向・志向性を示す文化として姿を現し始める。

太陽の光は様々なものを照らし出す。それは様々なものの様々な側面を地球の運行とともに照らし出す。しかし我々が「照らし出しているという思い」に至るためには情報が必要である。それは

物体からの反射光である。

太陽は地球から約 149,600,000km の彼方に在り、その直径は地球の直径 12,756km の 109 倍にあたる約 1,392,000km である。広大な宇宙空間から考えれば確かに点光源ではあるのだが、地球との距離とその大きさの関係からすれば、太陽放射光は常に平行に照射されていると考えて差し支えない。しかし、それを受光する物体は様々な形態を持っている。つまり様々な方向への「面」によって構成されている。多少の屈折はあるとしても、太陽からの概ね平行な光は、物体に衝突した瞬間に様々な方向へと進路を変える。或る光はそのまま去り、或る光は更に隣の面に衝突し、或る光は真っすぐに我々の肉眼へと飛び込んでくるのである。それは釈迦牟尼が中心となる以前の様々なエレメントが個々に示す指向性の混在する広がり場・空間における情報の輻輳の様子と極めて類似する。それは一種の混沌であり、その有様から我々が感受する、硬い・軟らかい・柔らかい・暗い・眩しい・明るい・気味が悪い等の言葉で表現を試みるどころの「質」は、太陽と地球の運行と人間が生み出した構造物・造形物を含む地域に独自の形・形が持つ面の傾き = 面の傾斜・傾向に依存するのである。

光とは白い闇<sup>2)</sup>である。太陽直射を眺めることで我々は視力を奪われる。霧の中・雲の中・吹雪の中で、我々は自身の位置を見失う。光のボリュームと質が我々の脳内に「映像 = イメージ」を生み出すのである。



Fig.3a 日の出と周辺を写したパノラマ写真（カラー） 筆者撮影



Fig.3b 日の出と周辺を写したパノラマ写真（モノクロ） 筆者撮影

Fig.3a はパノラマ写真である。逆への字に屈折しているように見える道路は実は直線である。太陽の実体は大気の状態による光の拡散も加わって見ることは出来ないが、その光に照らされた構造物は「陰影」を伴ってよく姿を現している。Fig.2 における明暗と彩度のグラディエーションを思い出せないだろうか。

反射光を取り込むことによって脳内に生み出されたイメージは、しかし純然と実体をもって実在し、光の如何に関わらず自らを「触覚」において主張する。闇夜・薄明・日の出・白昼・日の入り・薄暮・闇夜。移り変わる光の散乱を眺める時、全ての価値の誕生の可能性を含む一見無秩序と捉えられる混沌の海から幾つかのエレメントを拾い上げて、新たな価値を生み出していく人間の創造性を予感するのである。

仏像と呼ばれるイメージの配置によって仏教建築は空間の内部と外部の指向性を持つようになったと考えられる。それは仏教建築においてのみ生み出されたのではなく、人知を超えたものとしての神やその力の象徴を核に持つ精神活動に関わる場所としての神殿・教会堂においても同様である

と思われる。点・核・中心から、方向・方位・軸へと、構造の基本が推移したことが理解される。おそらく精神活動に関わる内部空間の誕生とその拡張は、一種の聖域を感じさせる効果を持つ物体と現象の配置によって実現されるようになっていく。それは光と色彩とその移り変わりを伴った視覚を刺激する情報の利用を中心に、嗅覚・聴覚・触覚・味覚に連なる刺激が連結する体験のための内部と外部の生成へと繋がっていくのである。

人間は社会的な動物であるといわれる。勿論、集団としての社会を作る動物は人間だけではないが、一定のルールのもとに生活を営みながら新たなルールを創り出すという意味においては、人間がその典型であると思われる。社会は、「システム＝仕組み」の複合体としての複合態であり、それ自体が環境であると考えられる。自ら新たな環境を創り出すという人間の特性はここにも現れているのである。ルールは約束事であり、人間は「約束事によって相互に拘束し合う存在」であるとも考えることも可能である。それ故ルールの生成は、一定の強引さ・強制力を含んだ新たな繋がりでの生成である。人間は新たなルールの創出によって新たな人間同士の「繋がり・関係ネットワーク」を創り出している。そこには様々な情報や物質の流れの生成が含まれており、ある種の人間はそれらを用いてこれまでに見たことの無い環境を創り出す。そしてそこには常に自らを拘束する新たなルールが生み出されている。人間は社会において常に自らを拘束し、社会によって常に自他を拘束している。

人間が、多くの拘束から逃れることが可能となる空間・場所の典型が、自らの「家」であろう。勿論多くの場合、そこにも家族と呼ぶ最小の集団・社会が存在する。しかし、そこはそこを取り囲んで存在する集団・社会とはその自由度において大きく異なる社会である。個人にとって自らの家は「自身を開放する占有空間」であって、その中心はおそらく自分自身である。人間は自身の占有空間内を、一分子のように自由に動き回る。そこに軸の構造は極めて生み出されにくい。

民家・神殿・宗教建造物・巨大造形物・古墳その他歴史的建造物は、全て人間の営みの記念碑であるということを疑う者はいないであろう。それらは、個人としての自己主張・時代や宗教的精神の主張・力の誇示・優れた機能の実現など様々な価値を記念し、物理的・精神的両面においての「サイン＝sign・標識・看板・広告」であり、同時に多くの人々を導く「灯台」、疲れを癒してくれる「日溜まり」、或いは「港」のような役割を果たしてきた。多くの人々をその対象とすることが出来たという事実は、それらが何がしかの理由によって広く受け入れられたことの証明である。それは実生活に便利な機能・目新しさ・宗教心に代表される精神的な求心力・直感的で感情的な衝撃としての美・美しさ、それらに内在する喜び・快樂によってなのであると考えられる。

それらの記念物は地域の環境・風土の中に位置し、その美は、その所在が記念物の内部にあるうともその外部にあるうとも、その物自体の表面からの視覚刺激、即ち反射光によって人間の肉眼に捉えられ、知覚に関わる処理とおそらく認知に関わる処理を経た後に得られる映像＝イメージによっ

て生み出されるのであると考える時、全ての光にその行き先を与える面と、その角度の重要性が改めて理解される。

地球上の事物の位置は、地図・地球儀・モニター等の上に示される「緯線と経線の交点」によって示される。しかし実態としてのそのものを捉えようとする時にはもう一つの点である「高度」を予定しなくてはならない。海・山・平野、或いはそれらを包む大気の層。そこには、「そこにおいてしか生み出されない美」が、刻々と変化する光と共に生みだされている。歴史的建造物は、自らの位置に生まれる美と共に自からの価値をその光の効果によって示している。しかしその中に在って、特定の時代や地域を越える存在として認知される人工構造物は、自らが示す光の効果によって唯一無二の価値を示すものとして愛でられ、或いは崇められ、ついには自らの姿が示す美によって、人類の文化の生成と風土の関りを一つ証明するのである。

---

## 註

- 1) 大平隆洋著 随想『美のしくみ』, 私家版
- 2) 神田每実著『光・陰影・形—古代美術とその技法に見る光の影響とはたらき』愛知県立芸術大学紀要 No.34, 2005 年

---

## 参考 URL

ブリタニカ国際大百科事典 [https://kotobank.jp/word/ 説文解字 -87429](https://kotobank.jp/word/説文解字-87429)  
ブリタニカ国際大百科事典 [https://kotobank.jp/word/ 古事記 -64668](https://kotobank.jp/word/古事記-64668)  
[https://ja.wikipedia.org/wiki/ 風土](https://ja.wikipedia.org/wiki/風土)  
<https://translate.google.co.jp/>  
[https://ja.wikipedia.org/wiki/ 中華人民共和国](https://ja.wikipedia.org/wiki/中華人民共和国)  
デジタル大辞林 [https://kotobank.jp/word/ 物体 -619335](https://kotobank.jp/word/物体-619335)  
日本大百科事典 [https://kotobank.jp/word/ 物体 -619335](https://kotobank.jp/word/物体-619335)  
[https://kotobank.jp/word/ 古今和歌集 86-63702](https://kotobank.jp/word/古今和歌集86-63702)  
[https://kotobank.jp/word/ 風土 -123002](https://kotobank.jp/word/風土-123002)  
星野輝男著『風土記の系譜と伝統』兵庫地理, 32:15-19, 1987 年 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90002351.pdf>

---

## 表

表 1 観測点ごとの薄明と薄暮の時間, データ採集: 2004 年 9 月 2 日・4 日・5 日・9 日・10 日・12 日,  
作成: 2020 年 11 月 5 日

---

## 図版キャプション

Fig.1a アテネのアクロポリス定点撮影 (カラー), 2004 年 9 月 12 日 筆者撮影, アテネ市, ギリシア共和国,  
作成: 2020 年 10 月 19 日, データ数: 172 枚  
Fig.1b アテネのアクロポリス定点撮影 (モノクロ), 作成: 2020 年 10 月 19 日 Fig.1a より変換  
Fig.2 Fig.1a・Fig.1b を編集して得た色味と明暗の情報 筆者編集, 作成: 2020 年 10 月 19 日  
Fig.3a 日の出と周辺を写したパノラマ写真 (カラー), 2020 年 11 月 4 日 筆者撮影, 三浦岬, 神奈川県  
Fig.3b 日の出と周辺を写したパノラマ写真 (モノクロ), 同上